

産学官連携キャリア教育 の効果と評価

ー「三方よし」プログラムによる大学生の社会人イメージの変化ー

千葉経済大学 キャリアセンター

特任准教授 下地 美也子

1) 問題意識

- 近年では、就業体験を伴わない1日程度の“名ばかり”インターンシップが横行している。
 - ⇒ 教育的効果の高いインターンシップはないがしろにされることも。
- 2022年、産学協議会で三省合意が改正される。
 - ⇒ 従来のインターンシップはキャリア形成支援として4分類化。
 - ⇒ 低学年次からの就業観の涵養がより推奨されている。
- 現状、就職活動の実質的な早期化・長期化をもたらしている。
 - ⇒ 事前に自己の参加目的をしっかりと認識しないままでのインターンシップ参加によって、学生が社会的視野の広がりを欠いた状態で就職活動の流れに乗ってしまう状況を招いている可能性がある。

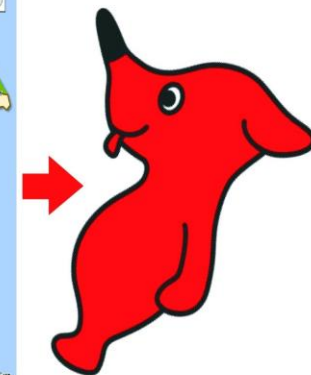
2) 事例発表の目的

- 産学官連携による正課キャリア教育の意義と在り方について、授業での実践と履修学生へのその後のインタビュー、受入企業およびプロジェクト事務局からのプログラム評価資料を通して何が見えてきたかを報告する。

3) 今回報告すること

- 産学官連携による正課キャリア教育「インターンシップ」の教育的効果の可視化の1つとして履修学生の「社会人イメージの変化」を明らかにする。

4) 本学の紹介（概要）



- 千葉県千葉市稲毛区（チーバくんの“あご”部分）に所在する、経済学部のための私立単科大学。
- 一学年定員：250名。学生数：1,223名。約7割が男子学生。
- 2年次に「経済学科」「経営学科」のいずれかを選択。
- 1933年 千葉経済学園創立。1934年 千葉県で最初の女子商業学校創設。1968年 短大設置、1988年 大学設置。
- 建学の精神：「片手に論語、片手に算盤」
- 学部の特色：small is beautiful! 「あたたかく面倒見が良い」
⇒1年次から全員がゼミに所属する少人数クラス担任制。

5) 本学の状況

- **2024卒学生就職率：96.4%⇒うち地元就職率77.7%**

⇒地元企業とのつながりが強く、

出口対策としての就職支援は生命線である。

- **2024卒3年次インターンシップ等参加状況：30.6%**

⇒令和4年度インターンシップ参加状況アンケート（3年生対象）より

※回答率54.2%

※2022年10月～2023年1月

大手ナビサイト発表の累計参加率
<(株)マイナビ発表数値86.1%>
とは大きな乖離がある。

Q1：インターンシップに参加しましたか？

	令和4年度		令和3年度	
参加した	87	30.6%	99	35.7%
参加しなかった	67	23.6%	128	46.2%
未回答	130	45.8%	50	18.1%
合計(人)	284	100.0%	277	100.0%

6) 実践内容

①本科目について

・科目名「インターンシップ」前期開講（2単位）2年次～

⇒科目名は三省合意改正以前に開講のため。タイプ2に相当。

⇒履修学生には、インターンシップ等に関心はあるものの、

自力ではちゃんと参加できるか不安だからといった

他力本願な理由を履修動機とする者が多い。

・インターンシップ初心者向け

⇒学生は就業体験を伴う2日間の実習を2社で経験する。

⇒受入先企業は業種の異なる地元中小企業9社の中から、

1社は自身で希望し、もう1社は教員が指定する。

6) 実践内容

②本科目の到達目標

- **就労に対する正しい理解を深める**

⇒ 社会や仕事の現実を知り、

就職活動に備えて自身に取り組むべき課題を言語化できる。

- **自分の適性や働く意義を認識する**

⇒ 卒業後の進路を決定する上で必要となる

自分自身の「働く軸」を明確にできる。

- **今後の学生生活により主体的に取り組む契機とする**

⇒ インターンシップを通して課題改善に向けての行動に挑戦し、

今後の行動目標を設定できる。

6) 実践内容

③授業概要：事前学習（前期15コマ）

- 前半は自己分析を中心に自分の適性・価値観・モチベーションリソースを把握し、参加目的を明確にする。
- 後半は受入企業との交流会ののち企業研究を行い、実習先での行動目標を定め、「働く意義＝軸」を見つける入口に立つ。

第1回	『イントロダクション』社会の現状、授業の目的・得られる効果、授業で求める要件
第2回	学生期のキャリアビジョン①『社会の仕事に興味を持つ』職業社会の仕組み、業種・職種の理解
第3回	自己分析ワーク①『社会人とのギャップを知る』自分の現状把握
第4回	自己分析ワーク②『働く姿をイメージする』自分の適性把握
第5回	自己分析ワーク③『自分の強みと弱みをこれからどうするか』自分の課題把握
第6回	企業研究①『まずは飛び込め！企業の魅力を考える会』実習先企業との交流質問会
第7回	学生期のキャリアビジョン②『働く意義とはなにか』インターンシップの目的の設定
第8回	自己分析ワーク④『働く軸について考える』自分の価値観の把握
第9回	学生期のキャリアビジョン③『仕事の選び方について考える』職業選択要因の理解
第10回	企業研究②『実習先企業の特徴と求める人物像を知る』企業研究の目的・方法の理解
第11回	企業研究③『どんな働く体験をしたいか』エントリーシート／履歴書の作成
第12回	実習準備①『実習先での働く魅力はなにか』実習先インタビューの準備
第13回	実習準備②『挑戦する目標を宣言する』実習中の行動目標の設定
第14回	実習準備③『効果的な参加態度について考える』実習中に心がけることの理解
第15回	『実習前オリエンテーション』実習にあたっての注意事項

6) 実践内容

③授業概要：実習+事後学習（夏季休業中） ※前期履修内容に含む

・指定された企業2社×2日（延べ4日間）の就業体験

⇒自分が設定した「行動目標」に挑戦する。

⇒実習先企業の社員と交流し、そこでの「働く魅力」を見つける。

・夏休み最終日に実習振り返りの集合研修（2コマ）

⇒挑戦結果を振り返り、就業体験から得られたものを考える。

③授業概要：成果報告（後期） ※前期履修内容に含む

・受入企業ごとにチームを編成し、報告会の準備

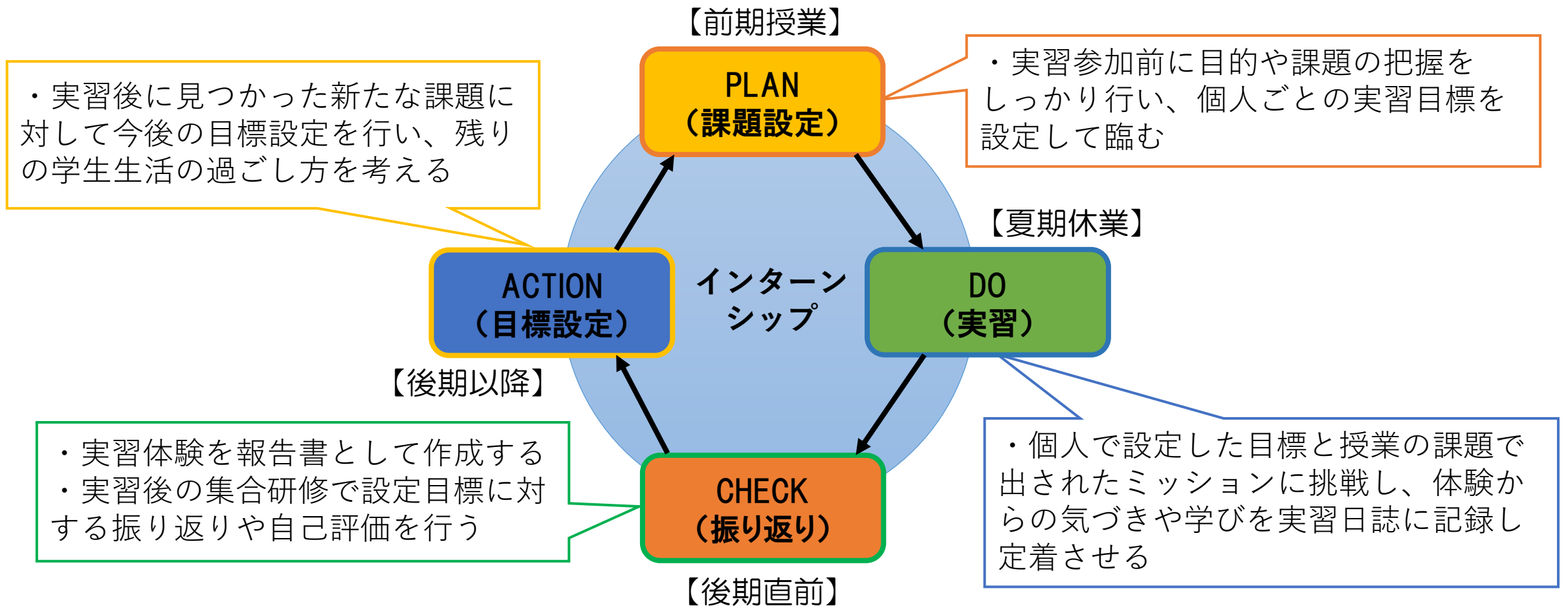
⇒チームごとに自主的に活動。

⇒成果報告会を大学祭企画として出展。

6) 実践内容

④本科目の特色

・PDCAサイクルに則ったキャリア教育プログラム



6) 実践内容

④本科目の特色

・「千葉県採用力向上サポートプロジェクト」との『産学官連携』

※千葉県補助事業として県内中小企業を対象に、人材（新卒）採用活動から人材の定着、育成について、そのノウハウ習得を目的としたコンテンツにより、組織活性化にもつながるプログラムを提供している。

⇒受入企業の参加目的は、直接的な採用ではなく

“自社の魅力アピール”実践の場として

実習プログラムに対する学生からの評価を期待している。

⇒全受入企業参加による事前ミーティング（オンライン）を行い、到達目標やプログラム実施に関するQ&A、好事例などを共有することで、学生の受け入れに対する共通意識を持つ。

6) 実践内容

④本科目の特色

- ・ **学生(大学)・企業・行政(地元)それぞれに利がある「三方よし」** 注1)
を目指す

注1) 下地 (2020) の時点では、「三方よし」とは、「大学生、大学、企業」として図にまとめられている。

- ⇒ 学生：自分にとっての働く意義を見つける（就業観の醸成）。
- ⇒ 企業：採用目的ではない業界の理解促進、若者の視点把握。
- ⇒ 行政：地場産業の魅力アピール。地元人材の還流。

- ・ **「三方よし」の実践で重視したこと**

- ⇒ 受入先企業とは事前に授業の到達目標を共有し、
参加学生には実習先の食わず嫌いを認識させることである。

6) 実践内容

⑤主な実習内容の一例

- ・ **訪問介護事業**

- ⇒利用者宅訪問同行、管理者会議陪席、請求書作成／支払業務等

- ・ **システム開発事業**

- ⇒模擬面接、プログラム体験、要件定義体験等

- ・ **福祉用具レンタル事業**

- ⇒聞き出す力・見つける力グループワーク、福祉用具体験会、福祉用具選定シミュレーション等

- ・ **運輸配送事業**

- ⇒荷積み・荷降ろし体験、ドライバー助手同行等

- ・ **カーリース事業**

- ⇒リース法人営業体験、営業同行訪問等

- ・ **機械部品製造事業**

- ⇒受注入力、売掛・買掛処理、生産管理現場見学、新入社員プログラム体験等

7) 調査方法（インタビュー＋資料調査）

①インタビュー対象者

- 筆者が担当する「インターンシップ」を履修した大学4年生3名
⇒2021年度当時2年生1名（男子）、2022年度当時3年生2名（男子）
- 履修動機はクラス担任からの薦めや斡旋への安心感で受動的。
- 授業への取り組み姿勢は真面目で意欲的。
⇒調査結果に偏りがある点は指摘できる。

②調査手続き

- 調査時期：彼らが卒業する直前の2024年3月に実施した。
- 調査方法：半構造化インタビューを行った。一人当たり約2時間。

7) 調査方法（インタビュー＋資料調査）

③プログラム評価アンケート

- ・ **正課「インターンシップ」に受入協力いただいた企業**
⇒ 2022年度は9社が参加
- ・ **実習受入のねらい・期待／実習受入で得たこと**
⇒ 8項目5件法で回答
- ・ **本産学官連携プロジェクト、キャリア教育プログラム、大学の体制**
⇒ 良かった点／改善点について自由記述

④プロジェクト事業報告

- ・ **中小企業人材採用・魅力発信サポート事業「千葉県採用力向上サポートプロジェクト」における2022年度の事業報告書**

8) 調査結果

- 実習実施前後で大きく 3 点の変化が確認できた。

①「働くこと」に対する考えに変化があった

- **すべての学生において、自らが希望した企業だけでなく、希望していないものの担当講師から指定された企業の2社で実習することによって、参加前に抱いていた「なぜ働くのか？」に変化があった。**

義務感（だから面倒、大変そう）⇒どの仕事も社会貢献になる。

お金を稼ぐ⇒働いてお金をもらうことで社会の一員になれる。

就職するってことは、対人、誰かと働くってこと。

- **事前学習～実習～事後学習を通して、働くことが単なるお金を稼ぐ手段（ライスワーク）から主体的な前向きさや他者との関わり方（ライクワーク、ライフワーク）に変化した。**

金儲けだけでなく、自分のアイディアで評価されたくなった。

生活面だけでなく考え方や発想にこだわりや意思を持つことが自立かも。

8) 調査結果

②社会に出ることへの認識に変化があった

- ・ **就職が現実的になり、自らごととして捉えられるようになっていた。**

（職業選択の）幅が広がったから、ちゃんと考えないといけない。

（インターン等で）企業ごとのこだわりや貢献度を知っておこう。

- ・ **他人の為に貢献しなければという意識が鮮明になっていた。**

相手のことを気にかけて仕事が成立するという考えを学べた。

若い人が地元に残るってことが、もう貢献になるのかな。

③地元への認識に変化があった

- ・ **実習先企業の社員の発言によって学生に地元（地域）に貢献したいという意識の芽生えがあった。**

これから生きていく場（地元）はどういう状況なのか？って気になった。

地元ですずっと過ごしてきて、収入面で東京に行くのは薄情な感じがして自分の中で嫌になった。

8) 調査結果

- 変化以外の教育的効果も確認できた。

④認知メカニズムの実践があった

- **授業で習ったことを実習の中で「答え合わせの場」として具体的に確認していた。**

社会について学んでから行くと、（授業で）言ってたこと分かるな。

「働く」を理解したおかげで実習先でのワークが分かりやすかった。

積極性が低かったけど、実習先から評価されて頑張り方合ってたなと思った。

8) 調査結果

- 受入企業側にも学ぶ機会を提供できた。

⑤大学生を受け入れたことで“従来”を見直すきっかけとなった

- **自社での「働く魅力」を示すことを通して気づきがあった。**

自分の仕事を学生様に話すような形式でしたが、担当者みな自身の仕事を振り返る機会にもなり、成長させていただきました。

事前に全体でマインドセットをしていただき、社内の方針が定まったと思います。

- **成果報告会での学生からの要望を通して気づきがあった。**

志望企業であるならともかく、そうでない人でも会社のことを調査し、我々が訴えたいことなどもきちんと折り込んでいるところがとても良かった。我々では気が付かない発見もあった。

時代に即していると思います。企業の方も旧態依然ではなく、変化しなくてはならないと感じました。

9) 考察

- **参加した学生は接した社会人の影響を受けて就労観を修正させていた。そして、その後の学生生活に目標を立てて自律的に就活を進めていけるようになっていた。**
 - ⇒ 業種イメージによる”食わず嫌い”の改善につながったことも学生（大学）にとってのメリットである。
- **企業は、採用する企業人ではなく、地域における一社会人としての接し方をしていた。**
 - ⇒ 採用目的でなく、現代の若者を理解する目的で受入に協力することで、実習を通して学生が自社をどう評価・理解しているかを把握できた。
- **行政は、地元の中小企業と連携して学生が地域活性化をより身近に感じられるようになること、そして、学生に地元意識が芽生えたことを肯定的に捉えていた。**
 - ⇒ 将来的な「定住人口」につながる可能性があると考えられる。
 - ⇒ 地域と多様に関わる人々を指す「関係人口」が注目されている近年の流れの中で重要な意味を持つのではないか。